



神通川の治水と富山の都市計画 その1

馳越線工事

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

神 神通川の堤防上からは、立山連峰がうっすらと見えるが、霧がかかってはつきりしない。今日は晴れているが、雲が多い。雨予報が回復しただけ、よしとすべきか。

神通大橋を渡る途中、川の下流側を眺めてみた。この辺りは神通川の馳越線だ。かつての神通川はここより少し上流の富山大橋辺りから、少し下流の富山赤十字病院辺りまでの二キロ位の区間が東にぐつと、富山駅よりさらに東側数百メートルまで湾曲していたのだ。現在の松川といち川が、その痕跡を示している。地図で見るとかなりのカーブを描いていたことがわかる。よって川が荒れると、ここで氾濫した。明治二十四（一八九一）年、お雇い外国人のデ・レーケは、富山県内の洪水被害の原因を調査する途次に神通川を視察して、次のように意見した。①地元からは湾曲部のショートカット案がでているが高額となる。②洪水を利用して開削すれば安価になるが、下流域を破滅させることになるのでやるべきではない。③この案が実施されれば、富山市街地と河川の両側にある平野は浸水の災難から救われる。④しかし、神通川の河口にある岩瀬港と富山市との舟運が困難となる。また、上流からの土砂によって、港の水深が浅くなる危険がある。

このように湾曲部をショートカットすれば氾濫は減るが、種々の問題が起りかねないと指摘している。そして、その四年後にデ・レーケは再び富山に赴き、神通川改修計画を立てた。それによると湾曲部の堤防嵩上げや補強工事を行うとともに、ショートカットを分流路として新設し、ある一定の洪水量を越えた場合はそちらへ流すというものだった。これなら自身が指摘した改善点とそれに伴う問題点をクリアしたように思える。

こうして神通川の第一期改修工事は、明治二十九年一月から三カ年事業として着工した。しかし、不思議なことにデ・レーケの計画案は無視され、工事は過去最大の洪水量を現河道で通過させるように、湾曲部を中心に約四・五キロの川幅を拡幅するというものだった。

しかし完成後も氾濫が起きて、第二期改修工事が明治三十四（一九〇一）年に重ねて着手されることになった。今度こそは湾曲部のショートカットを新設することになったが、なんと前述の②の工法が採用された。それは、ショートカットの中央部にわずか幅二メートル、深さ一・五メートルの新しい水路を掘り、さらに湾曲部発端の左岸堤防の一部を切り拓き、それを乗り越えた水流によって徐々に川幅を拡幅していくも

のだった。これは堤防の越流を意味する富山独自の用語を用い「馳越線工事」と呼ばれた。馳越線はデ・レーケのいう分流路を意図して施工されたのか、よくわかっていない。なぜなら、ショートカットが神通川の本流となってしまったからだ。どちらにしても、やるべきでないという施工法で新河道が出来上がってしまったわけで、やはり、数々の問題が起るようになった。



神通大橋からみた神通川下流
写真右の赤十字病院辺りまでが馳越線

[交通] 富山駅から神通大橋まで徒歩約10分